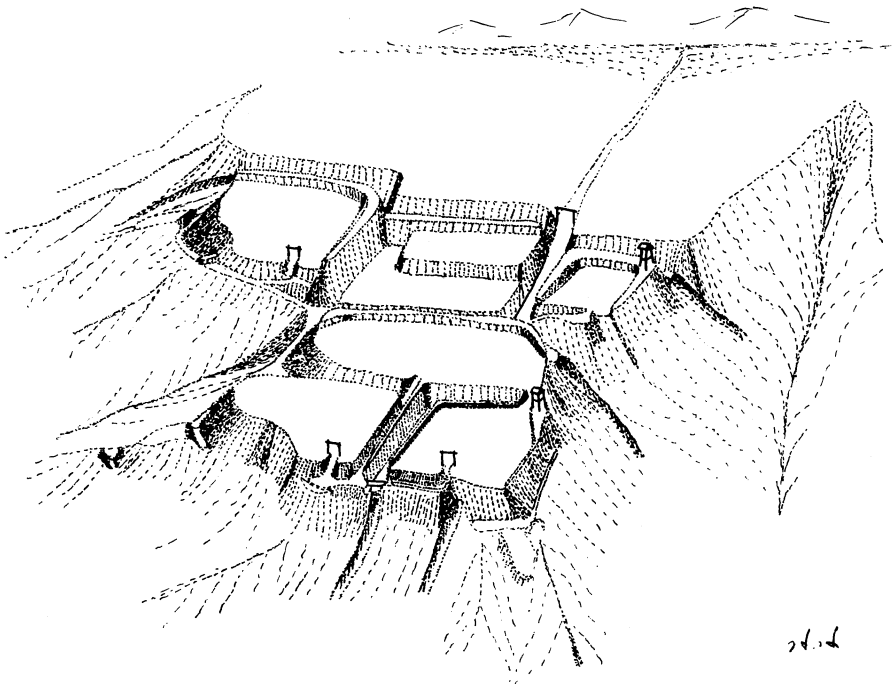
県道杉安・高鍋線道路改良工事関係発掘調査報告書

HO KITA

穂北城跡



1992・3

宮崎県教育委員会

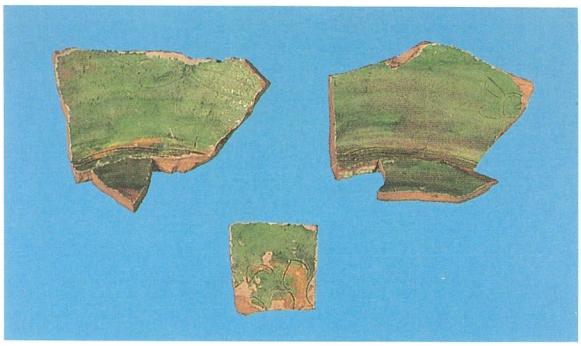
県道杉安・高鍋線道路改良工事関係発掘調査報告書

HO　KITA

穂　北　城　跡

1992・3

宮崎県教育委員会



序

宮崎県教育委員会では、宮崎県西都土木事務所の依頼を受け、平成元年度から3カ年にわたり県道杉安・高鍋線道路改良工事に伴う西都市穂北城跡の発掘調査を進めてまいりました。

穂北城跡は極めて保存状態のよい中世の城跡であり、遺跡の保存について西都土木事務所と協議を行ってきましたが、工法等の変更によりその影響を最小限に留めることができました。

今回の調査では、影響を受ける部分の発掘調査とともに縄張り調査、城跡全域の測量図作成を行いました。

調査の成果が、学術関係者のみならず社会教育・学校教育のなかで役立てられ、文化財保護行政の一層の発展の一助となることを期待します。

遺跡保存についての事前協議、発掘調査に際して御理解と御協力をいただいた西都土木事務所をはじめ調査に御協力をいただいた地元の方々に対し心から感謝申し上げます。

平成4年3月31日

宮崎県教育委員会
教育長　髙山義孝

例　　言

1．本報告書は、県道杉安・高鍋線道路改良工事に伴い発掘調査を実施した西都市穂北城跡の調査報告書である。

2．発掘調査年度と調査担当者は、第Ⅰ章第1節のとおりである。

3．本書の執筆は、第Ⅱ章を長友郁子、第Ⅲ章を菅付和樹、その他を北郷泰道が担当した。

4．出土遺物については、県総合博物館埋蔵文化財センターに保管してある。

5．穂北城跡の縄張りについては、八巻孝夫氏（中世城郭研究会）、千田嘉博氏（国立歴史民俗博物館）、出土陶磁器については大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）にそれぞれご指導、ご助言をいただいた。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに
　第１節　調査に至る経緯と経過……1
　第２節　遺跡の立地と歴史的環境……2
　第３節　穂北城跡の縄張り……2
第Ⅱ章　平成元年度の発掘調査
　第１節　遺　構……6
　第２節　遺　物……6
第Ⅲ章　平成２年度の発掘調査
　第１節　遺　構……10
　第２節　遺　物……10
第Ⅳ章　平成３年度の発掘調査
　第１節　遺　構……11
　第２節　遺　物……11
第Ⅴ章　穂北城跡調査をめぐる諸問題について
　第１節　縄張り図の作成について……15
　第２節　縄張りからみた穂北城跡の位置付け……15
第Ⅵ章　結　語……18

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……3
第２図　穂北城跡縄張り図および発掘区図……5
第３図　平成元年度発掘調査区およびトレンチ設定図……6
第４図　虎口埋土土層断面実測図……7
第５図　平成元年度調査区出土遺物実測図……9
第６図　平成２年度竪掘出土遺物実測図……10
第７図　平成３年度調査区位置およびトレンチ状況図……13

第８図　１の曲輪南東部腰曲輪出土遺物実測図……14
第９図　穂北城跡縄張り図（試作）……15
第10図　穂北城跡周辺地形図……16
付　図　穂北城跡測量図

図　版　目　次

口絵カラー　三彩盤
図版１　上　穂北城跡遠影（南から）
　　下　穂北城跡から西都市街地を望む
図版２　上　穂北城跡近景（南から）
　　下　穂北城跡２の曲輪近景（西から）
図版３　上　３の曲輪北の堀跡
　　下　１の曲輪と２の曲輪間の堀および土塁
図版４　上　２の曲輪虎口のスロープ
　　下　２の曲輪虎口の状況
図版５　上　２の曲輪スロープ
　　下　２の曲輪虎口およびスロープの状況
図版６　上　２の曲輪虎口および門跡柱穴
　　下　２の曲輪虎口門跡柱穴
図版７　上　平成３年度調査区遠景
　　下　平成３年度調査区近景
図版８　出土遺物（1）
図版９　出土遺物（2）
図版10　出土遺物（3）

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯と経過

西都市杉安から高鍋町に通じる県道杉安・高鍋線は、一部急カーブを持ち道路も狭いことから、その拡幅と線形の改良が計られることになった。しかし、その最も急なカーブの場所は、穂北城跡として周知された中世城跡であった。城が、要害の地とした地形は、現代の自動車道では走りにくい道路線形となっていたのである。

当初、道路改良による切り土法面は、城の重要な構成要素である「虎口」部を破壊することになっていた。協議は、城跡の現状保存を前提として進められたが、道路線形の大幅な変更は工事工法上困難であり、一部城跡にかかることは避けられなかった。最終的には、法面勾配を立てることで、極力「虎口」に対する影響を押さえることになったが、それでも西の「虎口」が失われたことは、ほとんど無傷に城跡が保存されて、残されてきていたこれまでの歴史を考えれば、残念なことと言わざるをえない。

発掘調査は、工事に先行して、平成元年度は２の曲輪の虎口及び曲輪の一部平坦面、平成２年度は１の竪堀、平成３年度は１の曲輪の南にめぐる帯曲輪について、それぞれ下記の日程、調査体制で実施した。

平成元年度

　平成元年11月27日～平成２年１月20日

平成２年度

　平成２年12月12日～27日

平成３年度

　平成３年10月14日～22日

調査体制

調査主体　県教育委員会

教育長	児玉　郁夫	（～平成２年度）
	髙山　義孝	（平成３年度）
文化課長	久徳　菊雄	（平成元年度）
	梨岡　　孝	（平成２年度）
	長友　　巌	（平成３年度）
〃　課長補佐	片野坂次彦	（平成元年度～２年度）
	串間　安圀	（平成３年度）
庶務係長	小倉　茂光	（平成元年度～２年度）

庶　務　係　長　税田　輝彦（平成３年度）
埋蔵文化財係　長　岩永　哲夫
主　査　北郷　泰道（平成元年度担当）
〃　主任主事　菅付　和樹（平成３年度担当）
〃　主　事　長友　郁子（平成２年度担当）

第２節　遺跡の立地と歴史的環境（第１図）

穂北城跡は、西都市大字穂北字谷ノ前に所在する中世の城跡である。西都市の中心から北方約４㎞、茶臼原台地の南の縁辺、標高120～130mに立地する。

茶臼原台地には、国指定史跡茶臼原古墳群（前方後円墳２基、円墳52基）が分布している。また、穂北城跡から見下ろす台地下標高約40mには、横穴式石室をもつ前方後円墳である千畑古墳が位置している。

南九州の、ことに火山灰台地の卓越した地域での中世城は、「原」と呼ばれる台地の縁辺の中で、自然に侵食された谷で要害となった場所を選択し、さらにその場所を人工の大規模な堀で区画し、城取りするのを基本とする。穂北城の立地もその例外ではない。ただし、穂北城跡の立地する地質は、シラス（入戸火砕流）の及ばない場所で、段丘礫層で構成される場所にあたり、いわゆるシラス台地の城とは、若干城造りのタッチが異なることは、後述するとおりである。

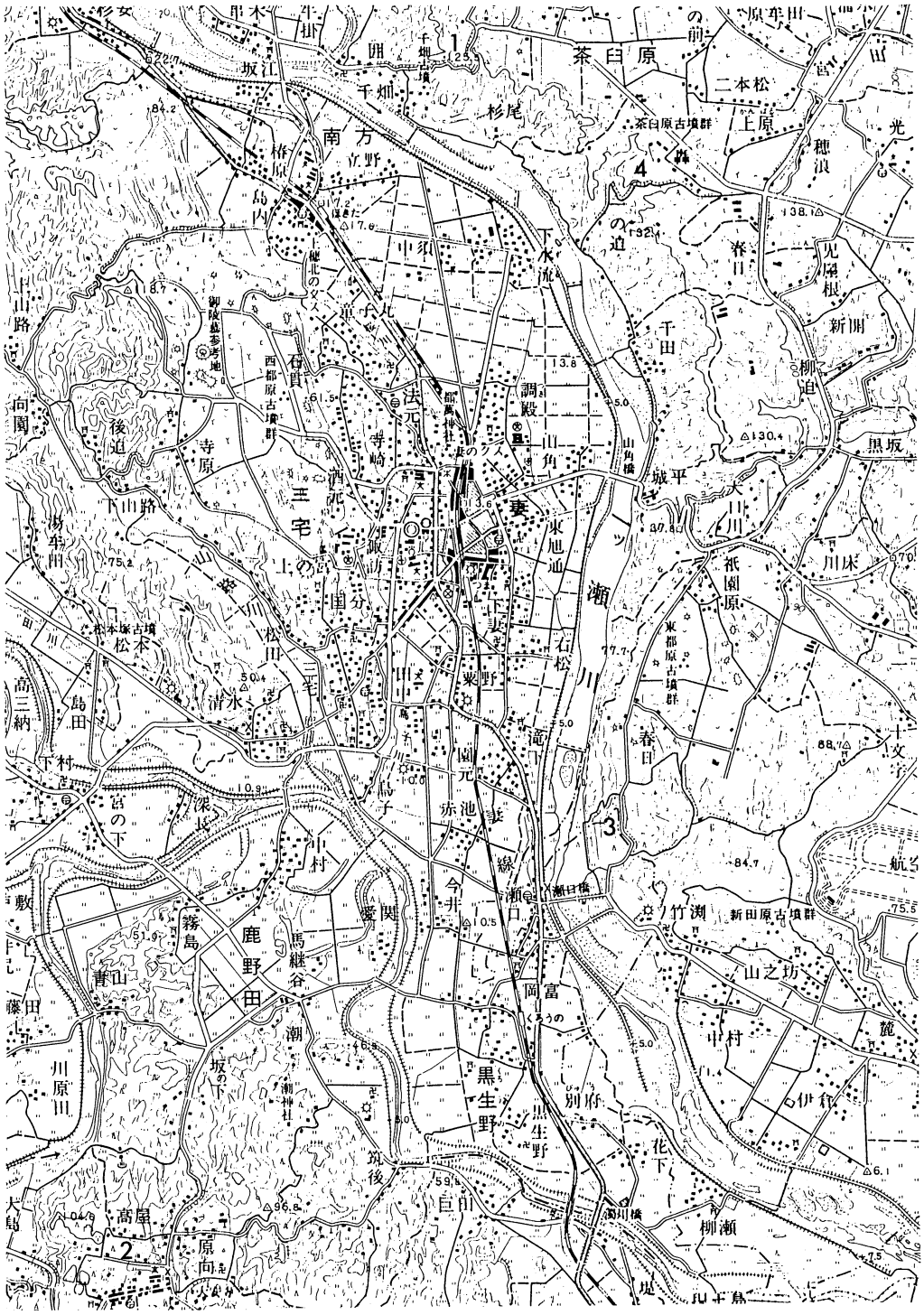
穂北城跡は、いわゆる伊東48城の一城として伝えられる。その主城である西都市都於郡城跡を南方約10㎞の遥かに望むことが出来るし、そのほか西都市と新富町に跨がる有峰城跡も西東約６㎞に遠望することが出来る。また、文献等においては詳らかでないが、穂北城跡から南東に約1.5㎞の近接した場所に仮称「千田城跡」と呼ばれる城跡も所在している。穂北城跡の地に立って周辺を見渡した時、現在の西都市市街地を取り囲む形でのこれらの城の配置が、それぞれに地に利を得た要害の適地を選択していることを実感することが出来る。

第３節　穂北城跡の縄張り

本報告書の記述を進める上で必要な穂北城跡の縄張りと各部の呼称について以下に述べる（第２図）。

穂北城跡は、６区画の曲輪から構成されている。茶臼原台地の自然の谷によりくびれた地形を有効に堀切、ほぼ左右対称に曲輪を配置する。

主郭と見られる南東先端部の曲輪を、ここでは１の曲輪とする。ａで南辺に土塁で囲まれた虎口を持つ。虎口の東の竪堀を１の竪堀とする。１の曲輪は三方に土塁を持ち、ｂで



第1図　遺跡位置図(1/50,000)

1. 穂北城跡　2. 都於郡城跡　3. 有峰城跡　4. 千田城跡

は土塁が幅広となり、櫓台としての役割が考えられる。

1の曲輪の西の曲輪を2の曲輪とする。この曲輪には、土塁はみられない。1と2の曲輪の間は、2重の堀となり、1の曲輪の堀が深く、2の曲輪の堀は浅く、cの中央は土塁状に残されている。1の曲輪の堀の南端は、さらに竪堀として切り落とされている。これを2の竪堀とする。dの部分で張り出し部が見られ、1の曲輪の深い堀底に対し横矢の機能を持つ部分であろうか。このdの張り出しの付根部で、2の曲輪の堀底から1の曲輪aの虎口へと木橋で連絡されていたものとみられる。2の曲輪eの虎口は、1の曲輪aの虎口より簡素な作りである。

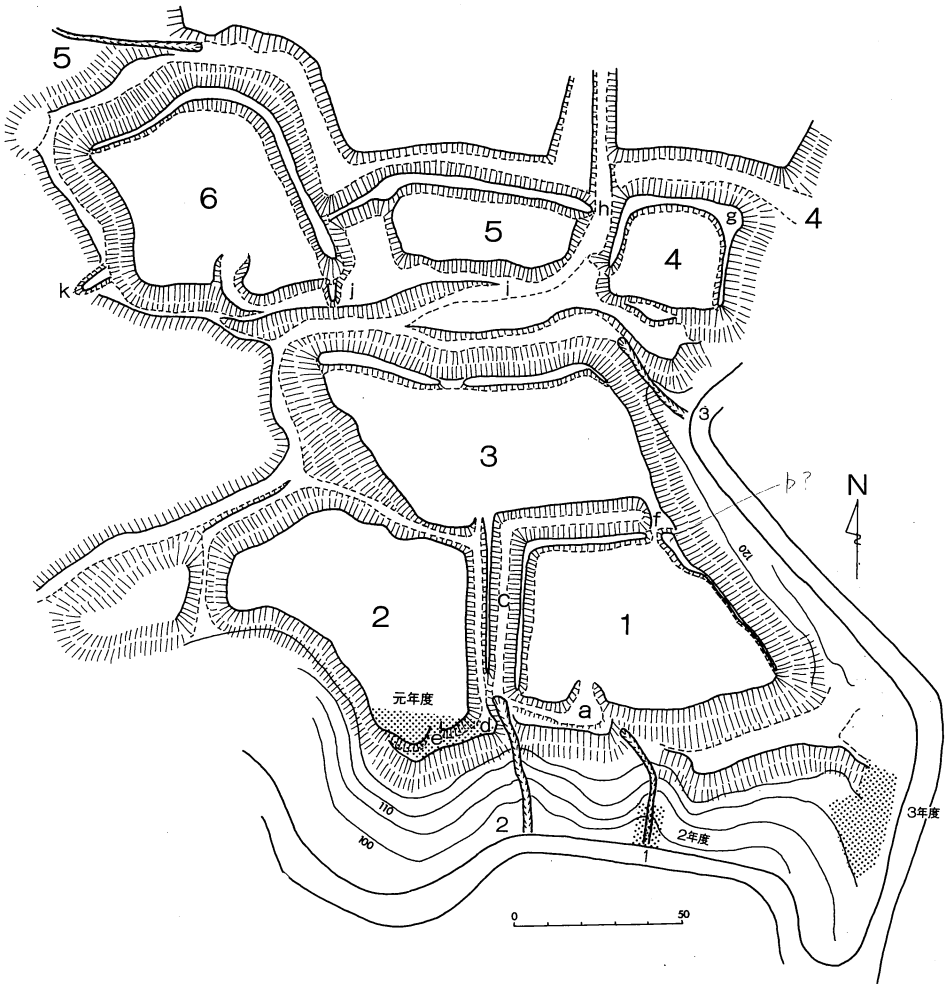
1・2の曲輪の北の曲輪を3の曲輪とする。この曲輪は北辺のみに曲輪を持つ。また、1と3の曲輪の間は、東端のfで土橋として連結されている。

3の曲輪の北東の曲輪を4の曲輪とする。この曲輪は、「コ」字形の土塁で囲まれている。穂北城跡の中では、最も小さい曲輪である。gの部分で土塁は幅広となり櫓台としての役割が想定される。3と4の曲輪の間の竪堀を3の竪堀とする。

4の曲輪の西隣の曲輪を5の曲輪とする。この曲輪は、北辺のみ土塁を持つ。この4と5の曲輪の間のhがいわゆる「大手」に当たる場所であろう。このhからiは廃城後に道として掘削されている。城跡の南に通じる現在の県道が建設されるまで街道として利用されていた道である。

5の曲輪の西隣の曲輪を6の曲輪とする。6の曲輪は、「L」字形の土塁で囲まれる。また、5の曲輪の北辺の土塁は、6の曲輪の「L」字形の土塁に連絡する。6の曲輪の南東角部jそして南西角部kには、小規模な土塁が設けられ通路を遮断している。

4・5・6の曲輪の北側は堀で区切られ、4の竪堀、5の竪堀で防御が補強されている。



第２回　穂北城跡縄張り図及び発掘区図

第Ⅱ章　平成元年度の発掘調査

第１節　遺　構

発掘調査の対象となったのは、２の曲輪ｅの虎口にあたる部分である。曲輪の平坦面の調査面積は狭いため調査の主眼は、２の曲輪の東の堀底から虎口へのスロープの形状、および虎口の遺構の状態を確認することに絞られた。

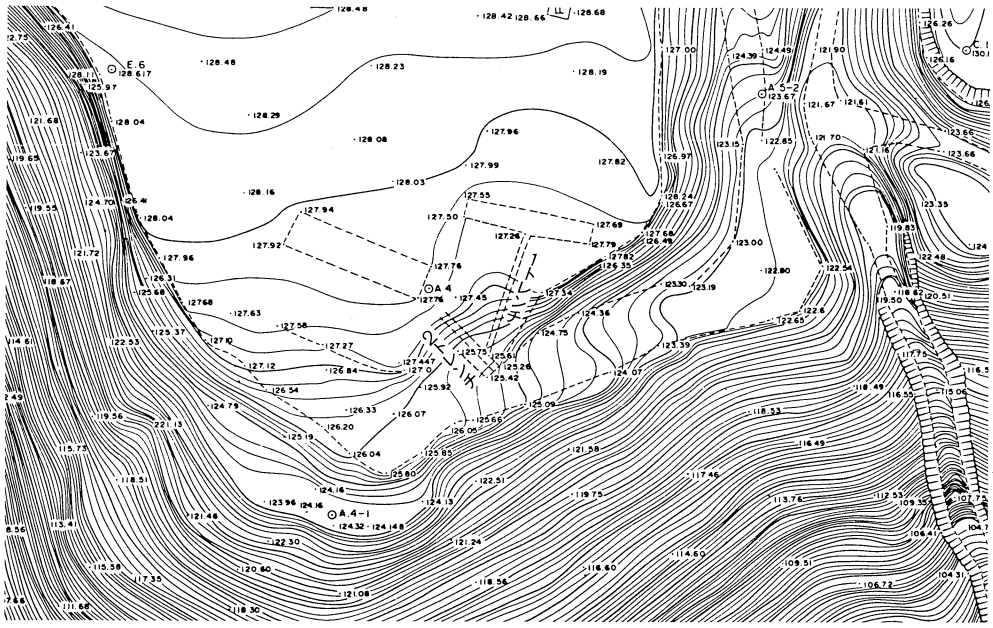
表面観察からも理解されるこれらの部位での注目点の一つは、１の曲輪の深い堀およびその延長の２の竪堀に対してｄの突出した部分が整形され「横矢」が意識されている点である。

虎口は１の曲輪の虎口と同様南辺に回り込むように「Ｊ」字形に堀底から虎口が接続するが、土塁等の囲みは見られない。

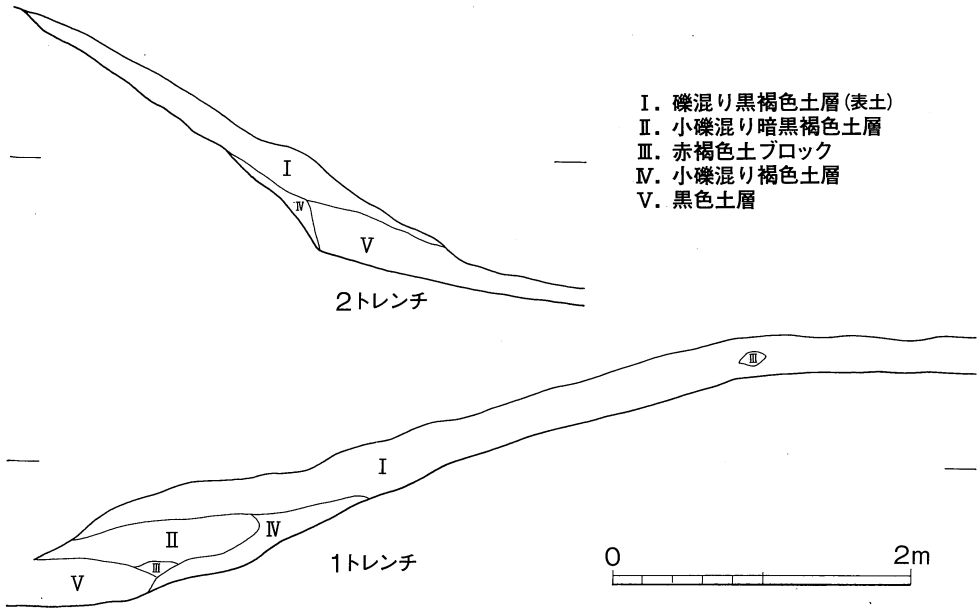
廃城後の虎口の埋設状況を確認するため１・２トレンチ（第３図）を設定し、土層断面の観察を行った（第４図）。そして、スロープの上がり切った部分には柱穴跡が確認されたが、西側の柱穴については、樹根に遮られ確認することが出来なかった（図版６）。

また、曲輪南辺の平坦面の精査の結果、柵列等を示す柱穴は検出されなかった。

これらの発掘調査の成果から、表面観察から得られる以上のデータは、門と見られる位置での柱穴と、虎口にいたるスロープの法面が築城当時はよりシャープに削られたということに留まる。



第３図　平成元年度発掘調査区及びトレンチ配置図(1/400)



第4図 虎口埋土土層断面実測図

第2節 遺 物

出土遺物には、青白磁、染付などの輸入陶磁器類と国産陶器および土師質土器があり、ほかに土錘（第5図22）、砥石（第5図23）がある。

三彩盤（第5図7a～c）

底部の推定径は、15cmを計る。口縁部の形状は明らかでない。陰刻文を内面および見込みにもつ。15～16世紀の所産とみられる。

染 付（第5図1～4・89）

1～4は、いずれも口縁が内湾し、底部が碁笥底をなす皿である。口径はおおむね11cmを計る。4は、見込みに吉祥字を描く。8・9は、高台のつく皿で、8は端反りの口縁をなし、外面に唐草文、見込みに十字花文を描く。9は、もともとからか風化のためか見込みの模様は明瞭ではない。3・8が16世紀前半から中頃、ほかは16世紀後半の年代が与えられる。

ほか、国産品として備前の染付（図版9-a）があり、1630～40年の年代観が与えられている。

青　磁（第５図６・13・15）

６は、内湾する口縁に雷文帯をもつ碗で、15は、発色の良い碗の胴部である。13は、碗の高台である。６・15は、14世紀末から15世紀中頃、13は、15世紀中頃から16世紀の年代が与えられる。

白　磁（第５図５・10・11・14）

５は、内湾する口縁をもつ碗で、10・11は、同一個体とみられる薄い器壁の端反りの皿で、14は、碗の高台である。いずれも16世紀代の年代が与えられる。

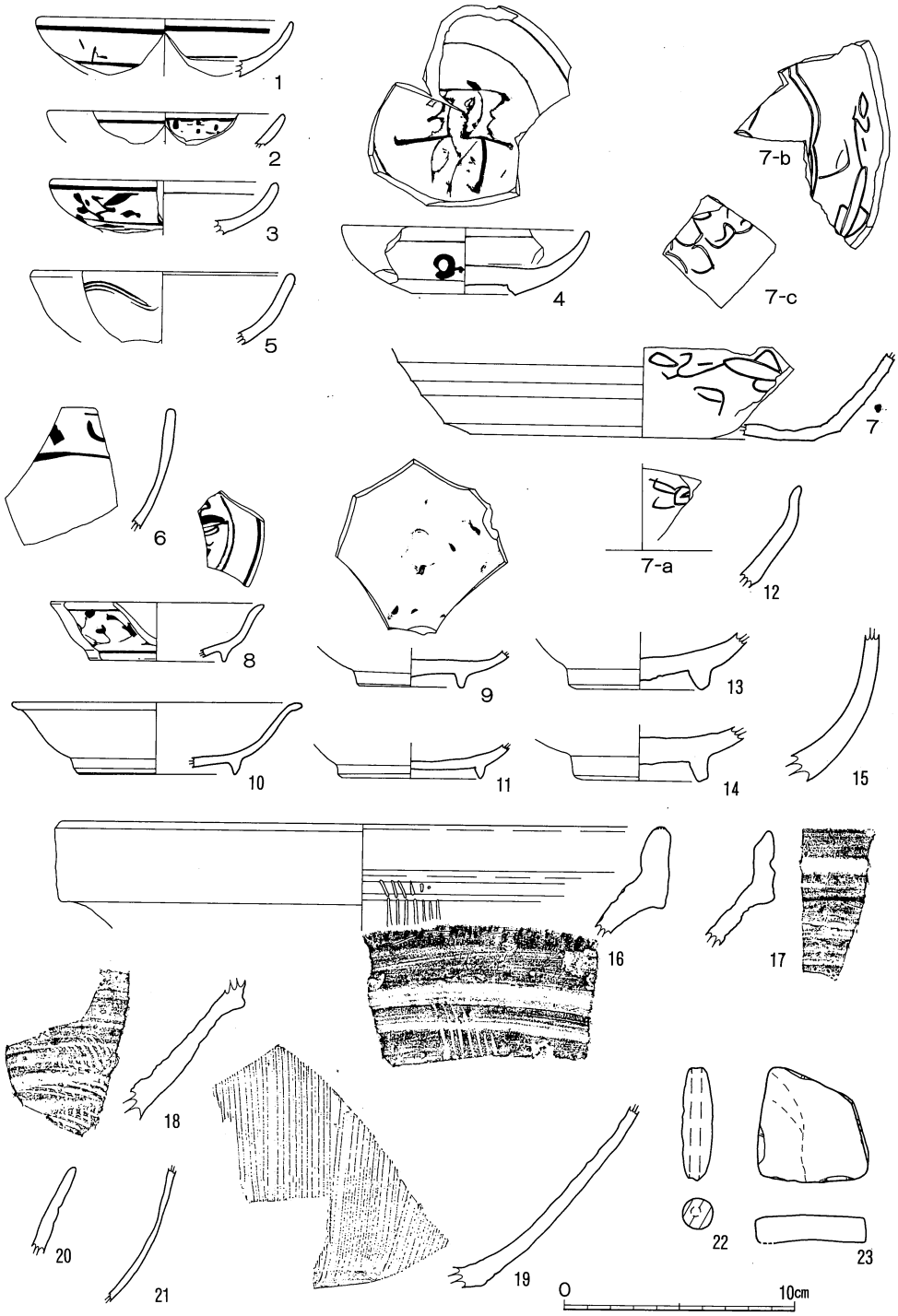
擂　鉢（第５図16～18・19）

16～18は、備前焼、それに対し19は、灰黄色を呈し、器壁が薄く条線も深く密な製品で、中国製の可能性がある。前者は16世紀、後者は13世紀から15世紀の年代が与えられる。

土師質土器（第５図20・21）

20は、いわゆる素焼きの坏、21は、器壁の薄い碗のたぐいの胴部片である。

その外、12は赤褐色を呈する瀬戸系の天目碗で15世紀から16世紀前半の年代が与えられる。また、龍文を描く景徳鎮窯系の碗（図版９-b）、朱描きのある白磁皿（図版９-c）、東南アジア産の可能性のある壺（図版９-b・e）なども出土している。b は16世紀後半、c は15世紀、d・e は15～16世紀に当たる。



第５図　元年度調査区出土遺物実測図

第Ⅲ章　平成２年度の発掘調査

調査箇所は、１の竪堀が県道と接する道路拡幅部分約165平方メートルが対象となった。しかし、県道と接する部分は、約99平方メートルにわたって崩壊していたので実際の調査面積は、約66平方メートルであった。

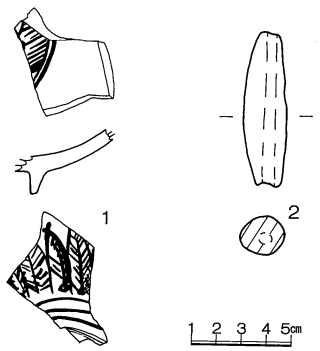
第１節　遺　構

築城時に掘られた空堀が、発掘の結果良好な状態で検出された。竪堀は約１メートルの埋土に覆われており形状は箱矢研を呈する。傾斜は約60°と周りの斜面と同じで堀底に硬化面は認められなかった。竪堀の末端部は県道と接するところで崩壊しており、県道より下の斜面まで竪堀は延びていなかった。

第２節　遺　物

出土遺物は全部で６点で、全て竪堀の埋土中から出土した。内訳は土師器片４点、陶磁器片１点、土錘１点であった。

１は16世紀後半の芭蕉文の染付である。２は土錘である。



第6図　平成2年度発掘出土遺物実測図

第Ⅳ章　平成３年度の発掘調査

第１節　遺　構

本年度調査地は、１の曲輪の南東側に突出した尾根状地形の部分にあたり、現県道はここを大きく迂回している。調査前の観察では、尾根部分から東側は既に削り取られ、モルタル吹き付けの道路法面となっていたが、その法面の西側には狭い平坦面が上下３段見られた。このうち、下段は西側が既に削り取られていたため、時間の制約上、上段と中段の平坦面を対象にそれぞれトレンチを入れて遺構を確認することとした。

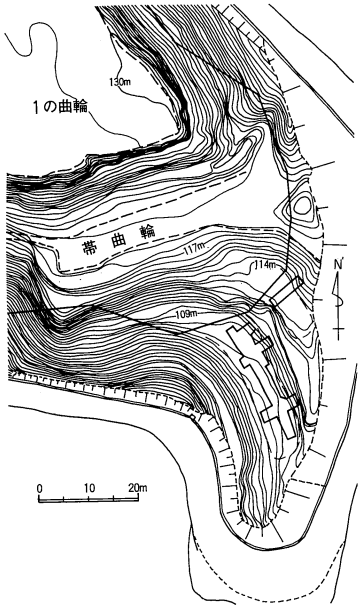
その結果、これら上・中段はともに表土が浅く、大きな石など既に地表面に露出しているものもあった。上段はピット等の掘り込みは確認できなかったが、法面と平坦面の境は明瞭で、この平坦面は地山を削平し作り出した腰曲輪状の遺構と考えられた。しかし、盛土部分は確認できなかった。また、最も広い中段の平坦面では、地表上で石列が確認でき、そこを中心にトレンチを南北に入れた結果、北側から土師質土器や陶磁器の破片が出土し、ピットや不定形の落ち込み等が検出できた。ピット及び石列は平坦面中央付近を南北一列に並ぶようであったが、時間的に周辺まで確認することができず、相互の関連など不明である。法面と平坦面の境は比較的明瞭で、地山を掘削し、その土を西側斜面に盛土し平坦面を拡張した様子が観察できた。ピット等の主に盛土上で検出した。この平坦面も上段同様腰曲輪状の遺構と考えられる。

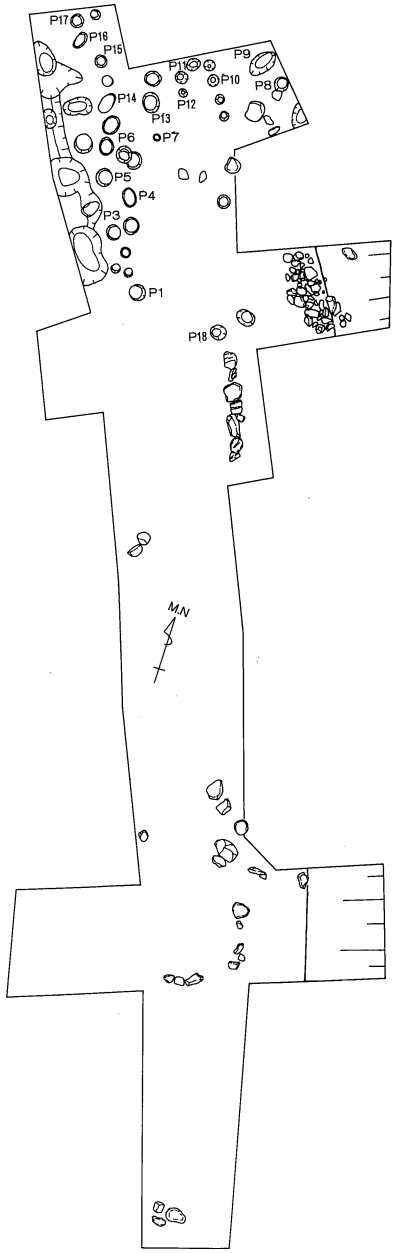
第２節　遺　物

上段の第１トレンチでは、表土から土師質土器、青磁、白磁、染付などいずれも数点ずつ出土している。このうち、１は櫛描線刻文のある青磁碗で同安窯系のものである。推定口径12.8㎝。胎土は灰白色、釉色は明緑灰色を呈し、内面に一部貫入が見られる。12～13世紀の年代観が与えられる。２は、端反りの白磁皿である。器高3.7㎝、推定口径15.8㎝、同底径8.4㎝。胎土は白色、釉色は灰白色である。畳付は無釉である。16世紀代。３は、染付の皿である。内面口縁端部には2条の直線文が巡る。外面は唐草文である。胎土は白色を呈し、釉の厚さは最大で0.5㎜ほどである。推定口径は14.4㎝。16世紀前半代。４は、染付の碗である。胎土は灰白色でやや粗く、釉の厚さは0.9㎜ある。推定口径12.1㎝。16世紀代。

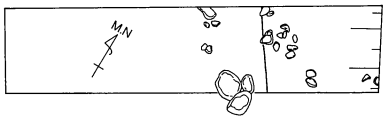
中段の第２トレンチでは、主として北側の表土から土師質土器片多数をはじめ青磁、白磁、染付が各10点前後出土したほか、備前焼擂鉢1、管状土錘1、弥生土器、文字不明の銅銭と思われるもの1枚などが出土している。また、ピットからは、P1で青磁3点、染付2点が出土したほか、Ｐ１・６・７・９・12・16からは土師質土器小皿の小片が、P3・４・11・15・18からも土師質土器小片が、P8からは白磁1点が、P1・５・10・13～17からは弥生土器片が、P16からは石鍋片１点がそれぞれ出土している。このうち、５は、Ｐ１出土の染付の碗である。胎土は白色で、釉は0.5㎜ほどの厚さである。内外面に貫入が見られ、外面には唐草文が描かれる。15世

紀中頃～16世紀初頭のものである。6は、P8出土の白磁小坏である。胎土は白色、釉色は淡黄白色を呈し、内外面ともに細かな貫入が見られる。15世紀代。7～8はP16出土で、7は滑石製石鍋の口縁部片である。外面には薄く煤が付着している。8は、弥生土器の底部片である。内面と底はナデ、外面はナデの上に薄い縦方向のハケ目が見られる。鈍い黄橙色を呈し、胎土には1～2mm前後の砂粒が多く見られる。推定底径6.8cm。9～24は表土除去の際に出土したものである。9は青磁碗で、推定口径12.2cm。口縁部外面は削りで段をなし、釉がやや厚めにかかる。胎土は灰白色、釉色はオリーブ灰色である。10は端反りの青磁碗である。胎土は灰色、釉色は明オリーブ灰色で、内外面に貫入が見られる。9～10ともに釉の厚さは0.4mmほどで、14世紀末～15世紀中頃の年代観が与えられる。11は青磁稜花皿である。胎土はややオリーブがかった灰色、釉色は明緑灰色を呈し、内外面ともに貫入が見られる。釉の厚さは0.9mm程度である。15～16世紀中頃。12は、青磁碗の底部である。胎土は灰色、釉色はオリーブ色で、畳付と高台内面が露胎である。釉の厚さは0.4mmほどである。推定底径5.2cm。14世紀末～15世紀中頃。13は、白磁の端反りの皿である。推定口径11.2cm、同底径6.2cm。胎土釉色ともに白色で、もに白色で、畳付は無釉である。高台上部付近に釉切れが見られる。。14は白磁の端反りの皿または碗と思われるもので、胎土は若干灰味がかった白色、釉は透明感のある灰白色である。13～14ともに16世紀代と思われる。15は白磁の皿である。胎土釉色ともに淡黄白色を呈している。内外面に細かな貫入が見られる。15世紀代。16は白磁の菊花皿で、内外面に陰刻文と貫入が見られる。胎土はやや黄味がかった白色で、釉色は灰白色である。釉の厚さは0.5mmほどである。16世紀代。17は染付の皿である。内面には玉取獅子文が描かれ、外面は唐草文である。胎土は白色で、畳付は無釉、所々に小さな釉切れが見られる。器高2.5cm、推定口径11.6cm、同底径6.8cm。18は、染付の碁笥底の皿である外面は芭蕉葉文、内面には草花文が見られる。器高2.9cm、推定口径9.8cm、同底径3.6cm。胎土は白色で、畳付は無釉。釉の厚さは0.5mm程度である。17～18ともに16世紀前半～中頃のものである。19は、備前焼擂鉢片である。口縁部は断面三角形に肥厚し、内面に櫛状工具による7本単位の溝が上端で約3cmの間隔をおいて施されている。胎土は灰色で、5mm前後の小石粒や筋状または小塊の橙色の部分が見られる。器面は赤味がかった褐色である。15世紀前半代か。20～21は、土師質土器の小皿である。20は、器高1.6cm、推定口径7.4cm、同底径5.1cm。全体的に摩耗しており、内外面はともにナデ調整と思われるが、底部の切り離し法は不明である。21は、器高1.8cm、推定口径6.5cm、同底径3.4cm。内外面ともナデ調整され、底部は摩耗しているものの、ヘラ切りと考えられる。22は土師質土器の椀と思われ、推定底径は7.1cmである。ナデ調整され、底部はヘラ切りである。20～22ともに胎土はち密で、1mm前後の赤茶けた酸化鉄様の粒が見られ、色調は橙色を呈す。23は管状土錘片である。現存長3.7cm、最大径1.5cm、孔径0.5cm、重さは7gである。胎土はち密で砂粒等は見られない。黒変部分の多い灰白色を呈す。24は、弥生土器の高杯脚部片と思われる。胎土は8同様1～2mmの砂粒を多く含む。外面は縦方向のヘラ磨き、内面は粗い縦ナデと思われる。鈍い橙色を呈す。





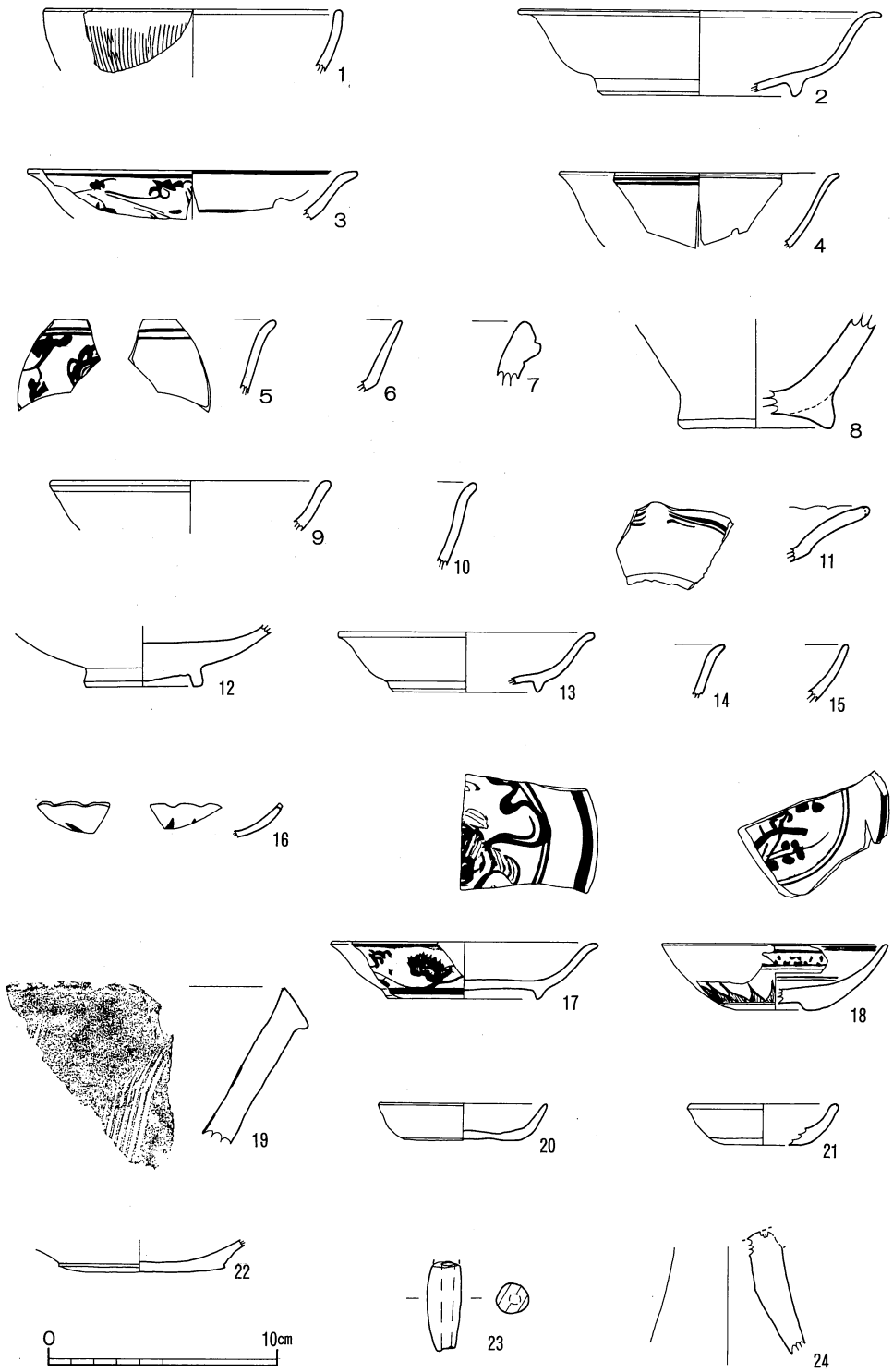
第2トレンチ（中段）



第1トレンチ（上段）

0 1 2 3 4 5m

第7図　平成3年度調査区位置図及びトレンチ状況図



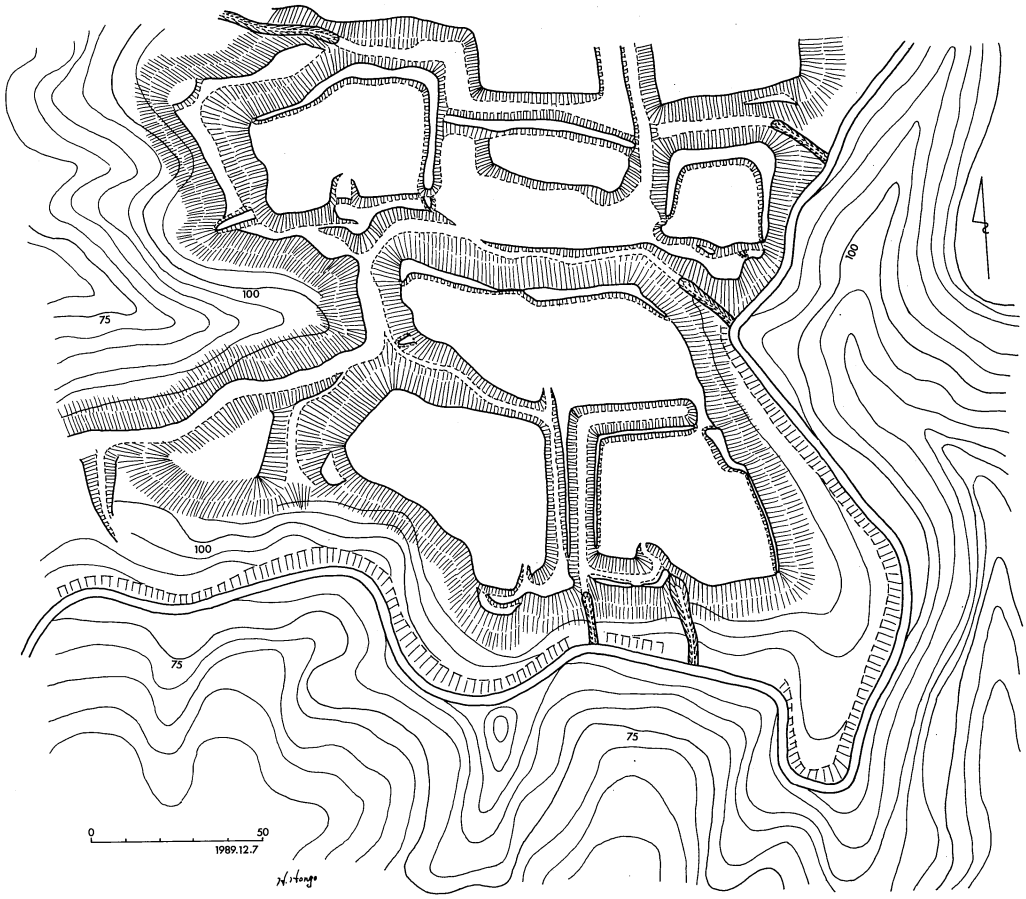
第８図　1の曲輪西東部腰曲輪出土遺物

第Ⅴ章　穂北城跡をめぐる諸問題について

第１節　縄張り図の作成について

これまで、県内での城跡の発掘調査は、幾つかを数えることが出来るが、城跡全体の縄張りを理解する試みを示した最初は、村田修三氏の調査指導を得て実施された、宮崎学園都市今江城跡（1984年調査）、車坂城跡（1986年調査）であった。その後も、城跡全体の縄張りを示した発掘調査は十分なされているとは言えない。

その意味で稚拙ながら県内の城跡調査において、実践的に縄張り調査と発掘調査を平行して実施した最初の調査として、縄張り図の作成についての諸問題を摘出して今後の課題としたい。

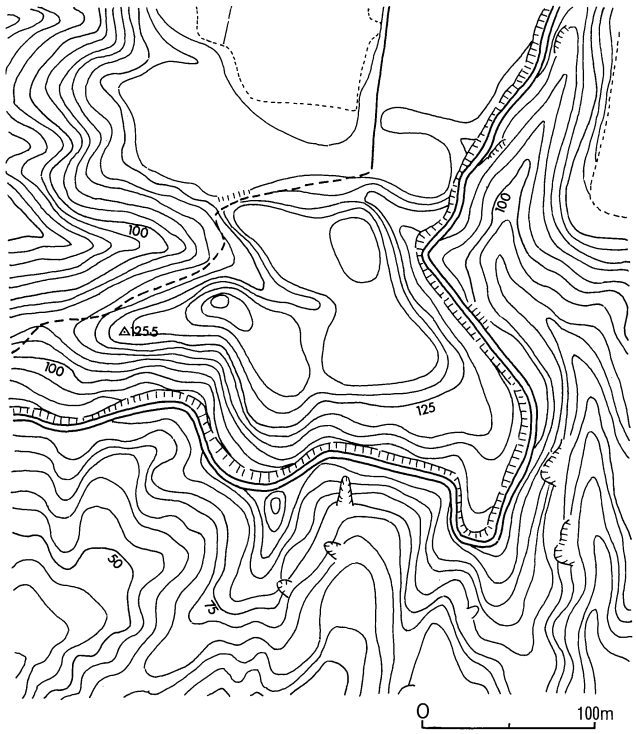


第９図　穂北城跡縄張り図（試作）

縄張り図作成として試みたのは、地形図などを参考とせず、まったく磁石と歩測により方眼紙に縄張り図を作成する方法である。

１～３の曲輪は、比較的森林の管理が行き届き見通しも良い場所であるのに対し、４～６の曲輪は植林されている場所もあるが管理も悪くほとんど踏み込むことも困難なブッシュの中に所在する。

第９図は、磁石と歩測で作成したものであるが、経験的な歩測と実測との差異については、習熟の度合いとして寛容していただくとして１～３の曲輪については、ほぼその形は把握されていると評価して良い。



第10図　穂北城跡周辺地形図（元図1/5,000）

それに対してやはり、ブッシュに遮られた４～６の曲輪は、現状に対して歪みが生じている。４・５の曲輪は規模が小さいため大きな違いは生じていないが、６の曲輪の北辺の土塁の形状は大きく歪みを生じている。

西都市の都市計画図には、1/5,000の地形図（第10図）がある。この1/5,000の地形図には幾つかの堀および曲輪の輪郭を読み込むことが出来る。この地形図を基に、先の縄張り図を修正することが出来る。

穂北城跡では、1/200の地形図の作成も行なっている。その成果品が付図であるが、準備した縄張り図を測量士に渡し、測量上の留意点を説明し、コンター25cm、急斜面地についてはその状況によって間を間引くことにした。

第２図の縄張り図は、こうして作成された1/200の地形図から表現を縄張り図として作成したものである。

以上、これらの図の比較から、得ることの出来る既存の地形図の善し悪しの判断が必要であるが、良好な地形図が得られるなら、千田嘉博氏も指摘するよう地形図による修正を行なうことで、より精度の高い縄張り図の作成が可能になるはずである。（千田嘉博「中世城館縄張り調査の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集、1991年）

第２節　縄張りからみた穂北城跡の位置付け

穂北城跡の縄張りについては、第Ⅰ章第３節に述べたので、ここではその位置付けについて述べる。

宮崎県における中世城跡は、大きく県北タイプと県南タイプに分けられる。その差異を決定付けるのはやはり地勢の問題である。県北は四万戸層群が優勢なこともあり、細い丘陵地を城取りする。それに対し県南はシラス台地に代表される火山灰台地が優勢で、平原の縁辺の適地を城取りする。シラス台地占地型の代表的な城跡は、同じ西都市の都於郡城跡であろう。都於郡城跡は、シラス台地を大規模な堀で縦横に裁断し、30区画に近い曲輪を作り出している。しかし、規模が大き過ぎ全体像を容易に把握することは困難である。

その意味から、ここでは同程度の規模をもつ高城町の高城跡（日和城跡）と穂北城跡を比較してみたい。大きな違いは、堀の規模および使い方である。規模の点から言えば、高城跡の堀幅は16～23m、深さ15･6m もあり、穂北城跡の堀幅より大規模である。これは、決定付ける唯一の要件ではないとしても、土質の違いからくる土木工事の容易さと決して無関係とは言えないであろう。

また、堀の使い方も、食違いに直交する堀で曲輪を裁断するのが高城跡の特徴で、さらに直交する堀の深浅により通路と虎口を構成している。それに対し穂北城跡は、１と２の曲輪の間に見られるように、平行する堀の深浅で防御機能を持たしている点が特徴といえる。

県内の城跡の中で、穂北城跡に似た城作りを示す城跡としては、川南町と木城町の境に位置する「松山塁」がある。松山塁の立地する地質も段丘礫層を基盤とする場所で共通点があるが、堀の平行する堀に深浅をつける使い方などにも共通点を見いだすことが出来る。ただ、穂北城跡に比べ曲輪の全体的な作りなどが大振であり、虎口の作りが明瞭でない。その点からすれば、「松山塁」は、1578年（天正6）には大友軍の陣として、また1587年（天正15）には羽柴秀長の陣として使用され、その後の手が入っていない、日向の城における短期的な時期の指標となる城跡との評価がなされる。逆には、穂北城跡は虎口の構成などに一歩進んだものを認めて良いと考えられる。

第Ⅵ章　結　語

穂北城跡の縄張りについて『日向地誌』は、次のように記載している。

「南ハ穂北川ニ臨ミ断崖二十余丈東北ハ渓谷ヲ帯ビ唯北一隅平原ニ接ス城上割テ三区トナル其南ナルヲ榎ノ木城ト呼フ東西二十八間南北十九間其中ナルヲ中ノ城ト呼フ東西三十八間南北十九間其東ナルヲ東ノ城ト呼フ方十二三間三城ノ間皆壕隍テ通シテ要害ヲ固フス－以下略－」

立地状況については、的確に地勢の要件が記され、その景観が浮かんでくる正確な記述である。しかし、曲輪については三区画と記述している。記述からすれば、「榎ノ木城」が１の曲輪、「中ノ城」が３の曲輪、「東ノ城」が４の曲輪となり、その規模の記述は現状に合う正確なものとみえる。

しかし、何故かくも明瞭なほかの曲輪が記載から漏れたのか、疑問が残る。その答えは、おそらく次のような事情であったと考えられる。『日向地誌』の時代において、穂北城跡が３区画として認識されていたのは、「大手」から３と５の曲輪の間に通じていた「街道」の存在と無縁ではないように思われる。改良の必要となった現道の建設される以前は、この「街道」が使用されており、その結果この道から先端にかけての３区画のみが城跡とされたのであろう。

元年度調査は、２の曲輪の虎口の形状と門跡の存在を確認できたが、柵列等の諸施設の存在は明らかではない。二年度の調査は、１の竪堀の形状を把握した。三年度の調査においては、１の曲輪の南東先端部の狭小な腰曲輪にも掘立柱建物を建築していたことが明らかになり、全容はなお不明であるが、城作りの一端を把握することになった。

出土遺物の上から得られる年代は、14世紀末から16世紀を中心とするもので、穂北城跡の年代観を大きく変更する資料はない。

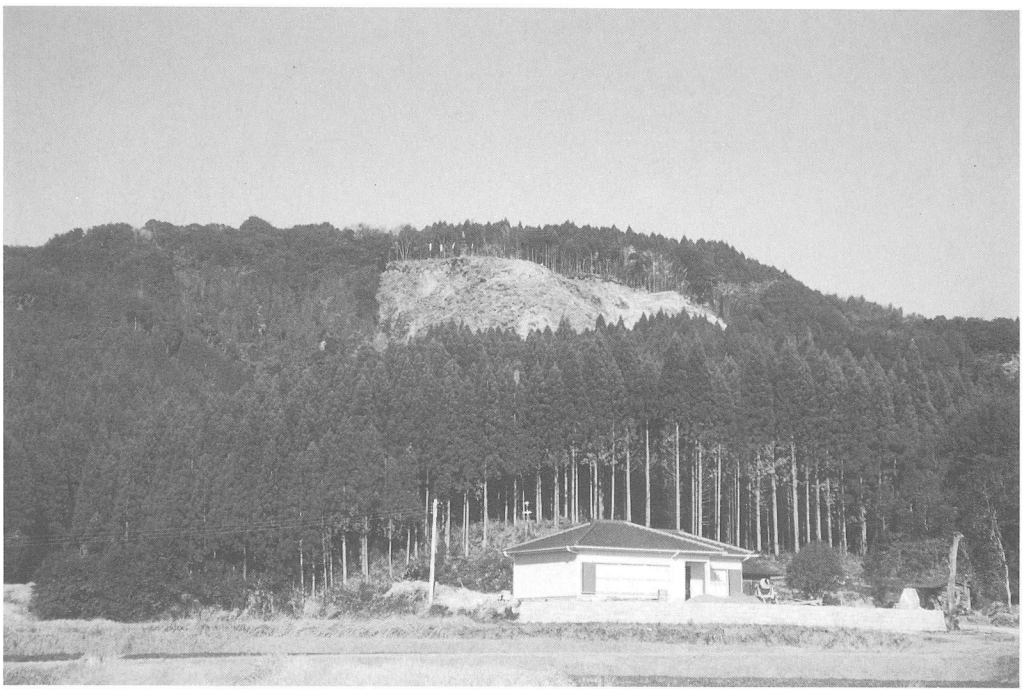
発掘調査の成果は断片に留まるが、縄張りの上から、きわめて遺構の残存状態が良く、城を構成する各要素を読み込むことの出来るサンプル的な城跡と評価することが出来、今後の保護と活用を真剣に考えておく必要を痛感する。

図　　版

図版1

穂北城跡遠影（南から）

穂北城跡から西都市街地を望む



穂北城跡近景（南から）

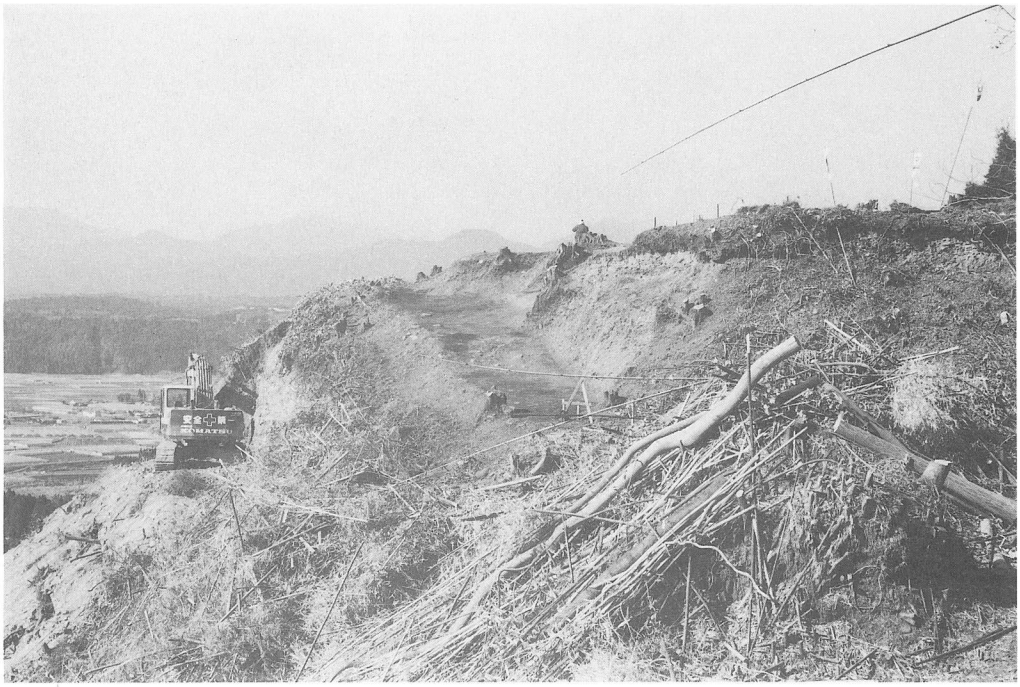
穂北城跡２の曲輪近景（西から）

図版3

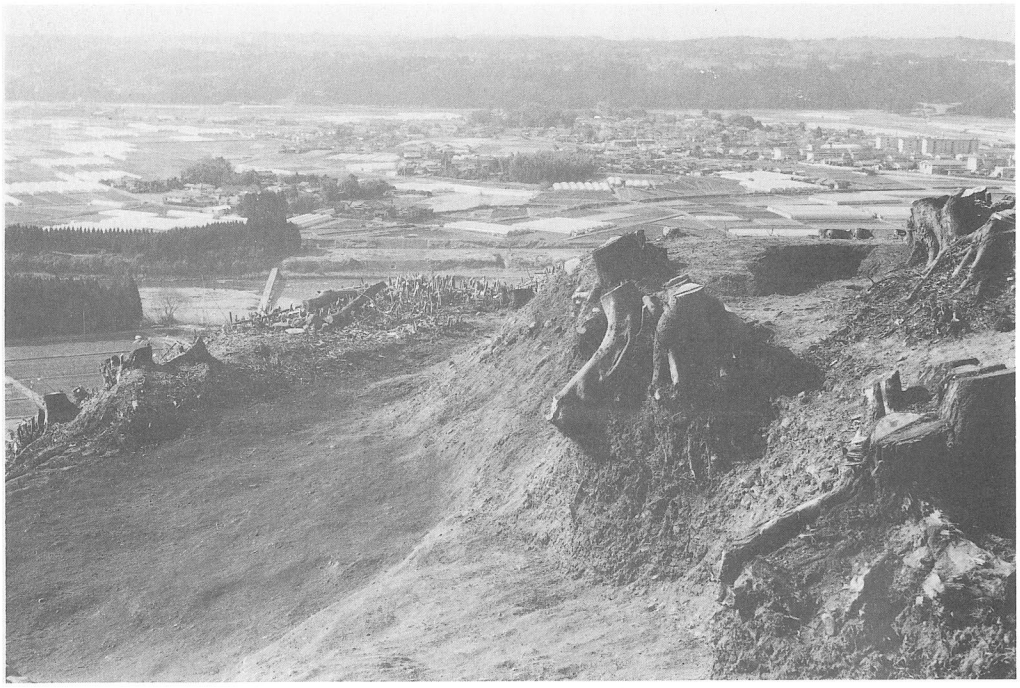
3の曲輪北の堀跡

1の曲輪と2の曲輪間の堀および土塁

図版4



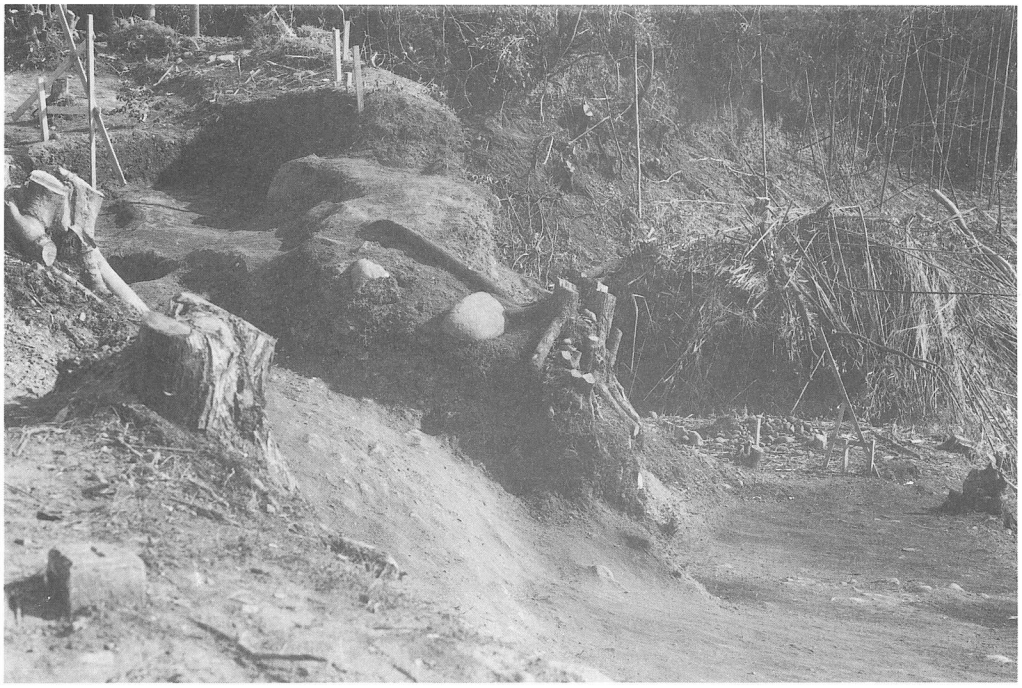
2の曲輪虎口のスロープ



2の曲輪虎口の状況

図版5

2の曲輪スロープ



2の曲輪虎口およびスロープの状況

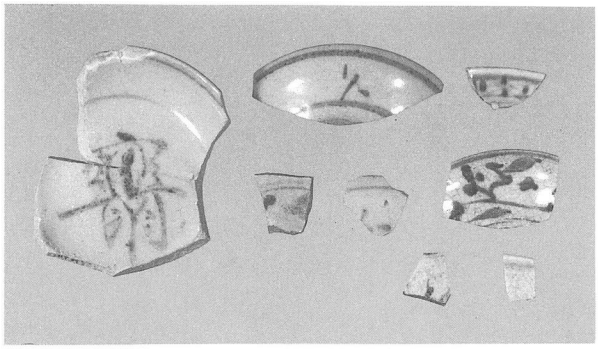
2の曲輪虎口および門跡柱穴

2の曲輪虎口門跡柱穴

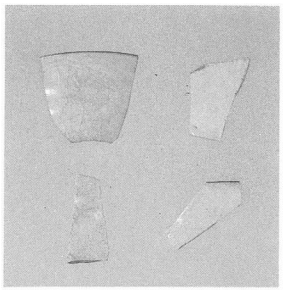
平成3年度調査区遠景

平成3年度調査区近景

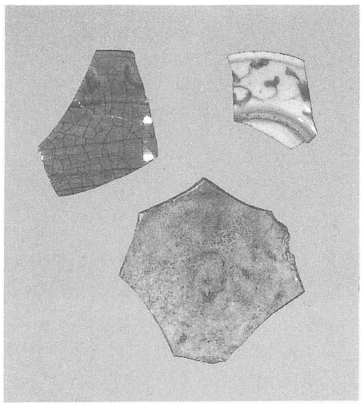
図版8〈出土遺物(1)〉



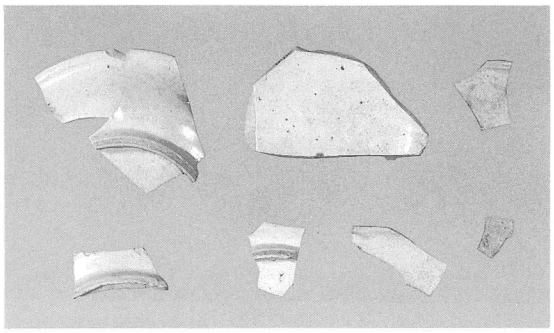
4・1・2
3



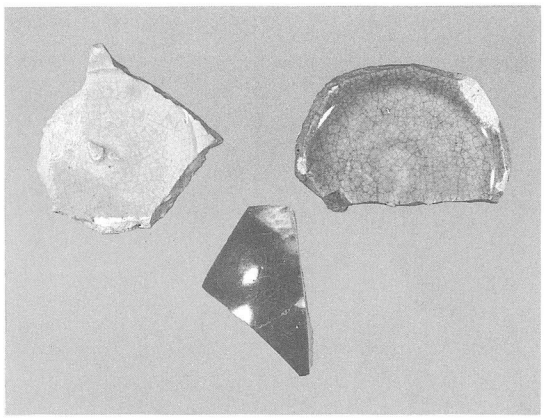
5



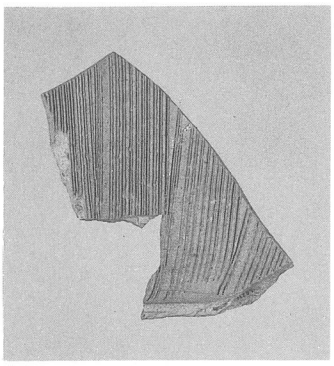
6・8
9



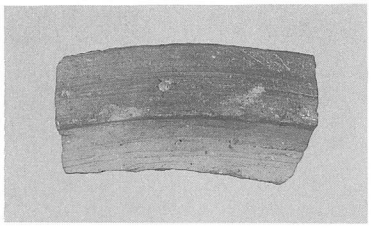
10・11



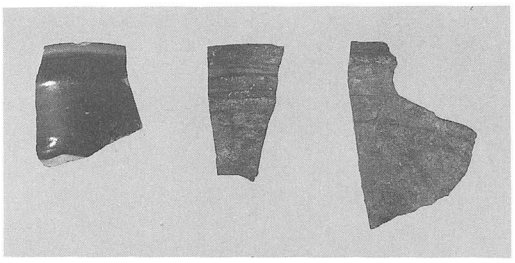
13・14
15



19

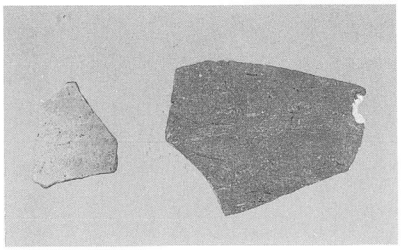


16

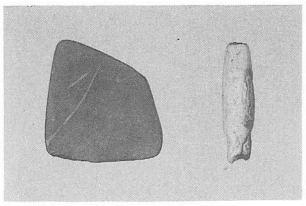


12・17・18

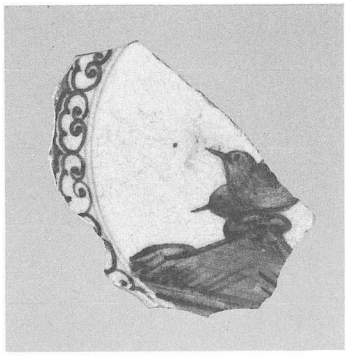
図版9〈出土遺物(2)〉



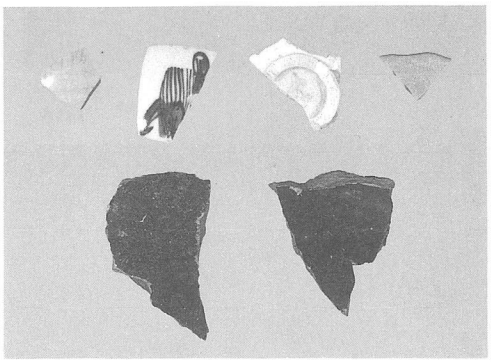
20・21



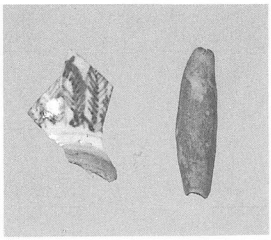
23・22



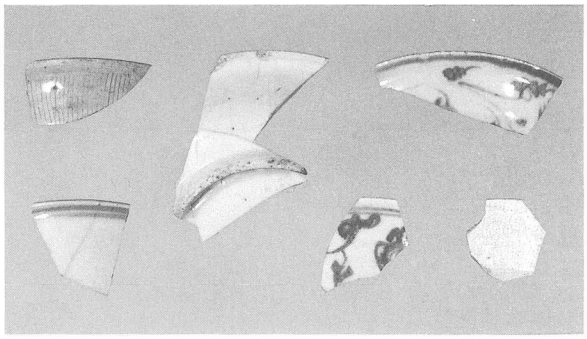
a



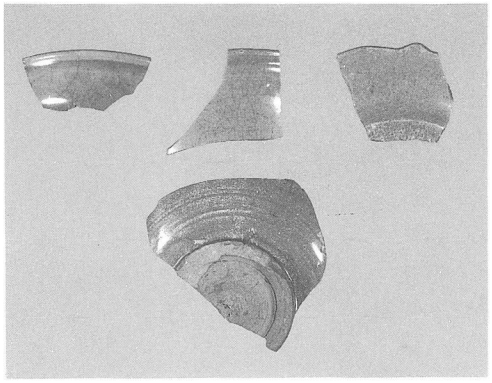
b・c
d・e



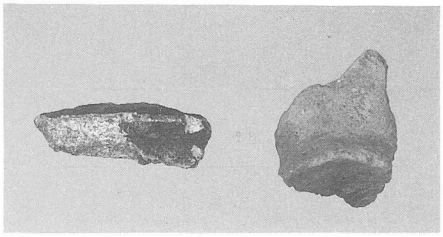
1・2



1・2・3
4・5・6

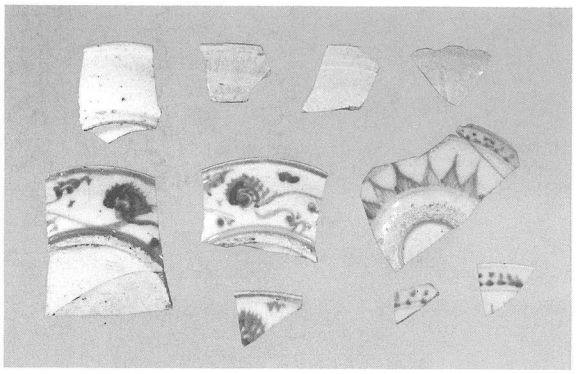


9・10・11
12

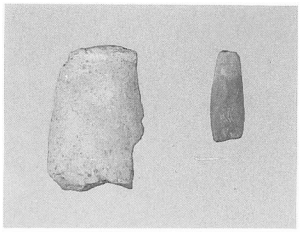


7・8

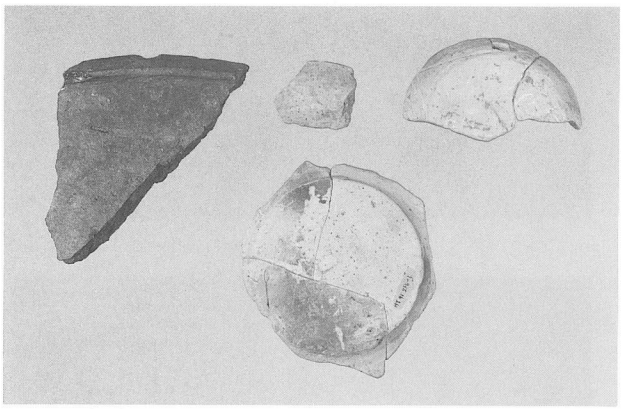
図版10〈出土遺物(3)〉



13・14・15
17・18



24・23



19・21・20
22

1:600

西都市穂北城跡縄張り図・地形測量図

宮崎県教育委員会

県道杉安・高鍋線道路改良工事関係発掘調査報告書

穂　北　城　跡

1992.3

編集
発行　宮崎県教育委員会

印刷　藤屋写真印刷株式会社